

Title	イタリアにおける社会民主主義とファシスト運動 : W. Hilton-young; The Italian left, a short history of political socialism in Italy, 1949.によせる
Sub Title	Social democracy and fascist movement in Italy
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.237(53)- 246(62)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0053
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0053">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0053</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Cive 十卷十)

- ③ De Cive, Chap. 13. p. 176.
- ④ Leviathan, Chap. 24. p. 233.
- ⑤ Ibid., Chap. 24. pp. 238—239.
- ⑥ Ibid., Chap. 10. p. 76. (水田洋譯「リヴァイアサン」(1)岩波文庫版「四七—八頁」)
- ⑦ Ibid., Chap. 24. p. 233.
- ⑧ De Cive, Chap. IV. 15. p. 58.
- ⑨ Leviathan Chap. 30. pp. 333—334.
- ⑩ Ibid. chap. 24. p. 237.

附 言

以上、ホッブズの經濟論に關して彼の著作を繙いて、忠實に展望して來たが、その論旨甚だ徹底せず、平面的敘述に終つた。續稿に於てホッブズの經濟思想と彼の自然法論との關係を特に彼の『自然狀態論』との關係の下に展開して行こうと思ふ。其處では本稿でいささか觸れた如く、彼の『自然狀態』は當時の市民社會を出發點としているが、それを契機として自然法觀を通じてその經濟論の意味を把握して行きたいと思ふ。出來うれば彼の著作「Behemoth, the history of the causes of the civil War」との關係に於て行く豫定である。

其處では、ホッブズ理論の性格の本質を解明し、あわせて、イギリス重商主義に於ける彼の社會哲學のもつ意味を裏付け、ハテイー、ロックに於ける經濟と政治との關聯の研究への手懸りとしたい。(未完)

資 料

イタリヤにおける社會民主主義と  
ファシスト運動—W. Hilton-young:

The Italian left, a short history of political  
socialism in Italy, 1949. によせる。

飯 田 鼎

- 一、はしがき
- 二、萌芽期のイタリヤ社會主義運動
- 三、イタリヤ社會黨の建設と發展
- 四、戦争、革命そしてファシズム
- 五、地下組織と抵抗運動

一

今日ようやく新しいファシズムの問題が、われわれの重大關心事となろうとしている。わずか十年前ファシズムのためにあれほどひどいめにあつたわれわれが、二度とあのようなあやまちをくりかえしたくないことは云うまでもないが、しかしそれにもかかわらず毎日の新聞やラジオをきいてみると、新しいファシズムというものが、それとなく身にひしひしとせまつて來

イタリヤにおける社會民主主義とファシスト運動

るのを感じる。いわゆるファシズムの正體が何であるかについてはすでに多くの書物が書かれ、正しい定義も下されてはいるが、われわれの目前にそれとなくせまつて來る新しいファシズムはそのような古典的なファシズムの定義をもつてしては、もはや説明しつくされないほどのものである。あたかも結核菌が薬に對して抵抗性をそなえて再び侵蝕をはじめると同じように、新しいファシズムは手をかえ品をかえ、あらゆる粉飾をこらして民主主義をうちたおそうとする。新しいファシズムの特徴は、みずから民主主義を口にしたが、民主主義を破滅させようとするもつとも悪質な、もつともいんげんなものであつて、彼等のえせ民主主義こそ新しいファシズムそのものにほかならない。

だがこの新しいファシズムが、現象的にはどんなに古典的なファシズムとちがつているように見えようと、結局においてその本質は同じである。ただそのやり口がより巧妙になつたにすぎないからである。従つてわれわれがよりよく新しいファシズムの本質をつきとめるためには、一九二、三〇年代におけるファシズムがどのようにして發生したか、その歴史的な根據をたずねることはきわめて重要であるといわなければならない。われわれが普通にファシズムと云つた場合まず思い出されるのはドイツのナチズムであり、ヒットラーのやり方はそれほどわれわれの頭に印象づけられているのであるが、ヒットラーもその「わが闘争」のなかで告白しているように、彼自身がファシス

トとなつたのは、實はイタリアのファシスト運動から學んだのであり、ムッソリーニのやり口から多くの教訓をみちびき出した結果であつたからである。

ムッソリーニはどのようにして政權を奪取するに至つたか。その露骨で殘虐な手段こそ實は今日のわれわれが最も知らなければならぬところであらう。それはなぜか。第一次世界大戦からムッソリーニが政權を掌握するまでのわずか七、八年の間にイタリアにはファシズムのための道をひらき、そのための準備をととのえた幾人かの政治家がいたことは注意されなければならぬ。たとえはわが國の吉田茂のような半ファシスト的人物もしくは公然とファシズムへの道をひらいていた幾人かの指導者たちが、イタリアにもいたという事實は、ヤミの再軍備と汚職とそして憲法を無視するというまことにファシズム的行爲に苦しむわれわれにとつて何物かを暗示しないであらうか。わたくしがイタリアにおけるファシスト運動の歴史にとくに關心をいだくのは以上の理由によるのである。

その前に「イタリアの左翼——イタリアにおける社會主義政黨の歴史」と題する本書に、私の批判をのべさせていただくならば、この書の第一の缺點はイタリア資本主義の發展についてその説明がきわめて不十分であることであらう。つぎに私の大きな不満は、一九二五年以後ファシスト政權のはげしい彈壓の網をくぐつて勇敢に組織的な地下活動を行つたイタリア共產黨の功績を高く評價していないことである。しかしそれにもかか

わらず本書は學問的に水準の高いものであることは否定しえない。とくに参考文献はイタリアの原典からなり、それをたんに心に讀みこなした苦心のあとが充分うかがわれるのであつて、しかもイタリア社會主義運動史の山とも云うべき一九一四年から一九二五年ムッソリーニの政權奪取までの十数年の間の記述に相當のページをついやしていることである。そこでわたくしは、この書を通じてイタリア社會主義運動とファシズムとの關係を歴史的に追求してみたいと思う。

二

ジミイホフはその著「國際労働運動史」のなかでつぎのように云つてゐる。「イタリアはヨーロッパ資本主義諸國のなかの一つである。その特徴は資本主義の發展の速度が非常にゆるやかで、ドイツ、フランス、イギリスおよびそのほか多くのヨーロッパ諸國におかれてゐる點である。經濟の上ではこの國は全く弱々しい國である。この國はほとんど石炭、鐵そのほかの主要な工業原料をもつていない。第一次世界大戦と第二次世界大戦の間に、イタリアは水力發電と兵器工業の分野では非常に發展したけれども、現在のところ依然として農業生産を主とする國である。全人口の五六％は農業生産と關係をもつてゐる。農業はおくれた技術や封建的な、また場合によつては封建社會以前のものでさえある農奴的な搾取制度を基礎にしてゐる」と。しかしイタリア資本主義のこれらの特徴は、實はすべての後進

諸國についても多かれ少なかれ見出されるのであつて、わが日本もその例外ではない。

このような資本主義的な立ちおくれと封建的な生産様式の殘存が、近代意識の成長をはばみ、やがてはファシズム勢力の増大をもたらしたのであつて、ファシズムの精神的な基盤となるものが、プチ・ブル的な階級意識であるとともに、それよりはむしろ近代以前の封建的な意識があつて力あつたことである。イタリアにおける社會主義運動の歴史が如實に證明してゐる。イタリアでは現在、社會黨と共產黨が、いわゆる共同戦線をはつて最大の野黨となつて敢闘してゐるが、しかし七十年にわたるイタリア社會主義運動をかえりみると、あらゆる失敗と錯誤によつて彩られてゐることを知る事ができる。

さて一八七〇年代から一八九二年のイタリア社會黨の建設までの約二十年間は、イタリア社會主義運動にとつていわば啓蒙と喧傳の時代であつた。多くの小王國に分裂し、一八七〇年代になつてようやくその封建的な眠りからさめたイタリア王國は、まず何よりも近代國家としての體裁をととのえなければならなかつたのであつて、カヴールやマジュニとしてガリバルディなどの運動が、民族的な獨立運動としてあらわれたのはきわめて自然であつた。こうして英國の議會政治とフランスの官僚制度の混血兒として生れたこの近代國家も、やがて産業革命の過程を終えると、ここに近代的なプロレタリアートの萌芽が、きわめて徐々にではあつたが、成長しつゝあつたのだ。しかし

イタリアにおける社會民主主義とファシスト運動

この當時の運動は農民一揆的色彩がきわめて強く、事實またこの時代の革命的運動と云えば農民を主體としたものが多く、この事實によつてもイタリア資本主義の立ちおくれということがはつきり理解することができよう。そしてのちにのべる一八九四年のシンシリー島の農民の暴動のごときも、その背後にあつてこれを動かしたものは社會主義者であるよりは、反封建主義を旗じるしとする自由主義的な改革主義者であつた。

さて一八八〇年代になるとマルクス主義の思想が次第に紹介されはじめ、その當時の最も有能な指導者の一人、カルロ・カフィエロは、資本論をイタリア語に譯して出版したほどであつたが、しかしその當時のイタリア社會主義運動に根強い影響をあたえていたのは、何と云つてもあのミハイル・バクレーニンであつて、風雲児バクレーニンは一八六八年から風光明媚の古都ナポリとプロレンスの間を往復し、その影響をうけた人々のなかには、さききのべたカフィエロやアンドレア・コスタなどがいた。一八七三年マルクスと不和におちいりついに第一インターナショナルが分裂して以來、イタリアはバクレーニンの無政府主義の勢力のもとにあつた。バクレーニンがイタリアの社會主義運動において果たした役割は、革命的な運動に人々を目ざめさせた點であつて、プロレタリア階級に彼等の敵が何者であるかを教えたのであつた。しかし當時の指導者であつたインテリゲンチヤは、空想的な無政府主義にあきたらず、理論的なマルクス主義に傾いていつたことはやむを得なかつた。すなわちアキレ・

ロリヤのごときはすでに共産黨宣言を紹介したのであつて、無政府主義とマルクス主義をして更にフランス人、ペノイ・マロンの改良主義というこの三つが混在しており、こうした思想的な混乱を背後に、一八八二年最大の工業都市ミラノにおいて、イタリア労働黨が生れたのである。その指導者はグジュセッペ・グロースであつて、マルクス主義の影響がいくらかは認められたが、労働者の運動そのものは急進的なものではなく、従つて組織的な力に缺けていたために、一八八二年及び八六年の総選挙においても全く議席がえられなかつたほどであつた。要するに一八九二年のイタリア社会黨の建設までの間は、大學教授や一部のインテリゲンチヤが大衆の中に入らずに、これと遊離して上から思想的な宣傳をやつていた時代で、ローマ大學哲学科教授アントニオ・ラブリオラやその門弟ベネデト・グロース、更に後に社会黨の指導者となつたフィリッポ・トゥラティなどはその代表的な人々であつた。

こうして、いづれにヨーロッパにおける社会主義運動には、マルクス主義勢力の勝利が歴史的なものととなり、とくに一八九一年ベルギーの首都ブラッセルで開かれた国際社会主義會議では、マルクス主義者と無政府主義者とが分裂し、その影響がイタリアにも及んで、ついに一八九二年ジェノアの大會では、無政府主義を排斥したマルクス主義者を中心として、イタリア社会黨が生れたのであつた。

考へることはできない。すなわちフランスとの市場獲得の競争と一八九六年のアビシニア侵略こそ國內における弾壓とほとんど時を同じくして行われたもので、それは早くもイタリア資本主義が、帝國主義的な段階に到達したことを示す「前ぶれ」にすぎなかつた。想えばこのクリスピのはげしい弾壓のなかに、すでにファシズムの素朴な姿を見ることができたであらう。

こうした情勢を前にして、社会黨がとつた手段は、ブルジョア急進主義者や共和主義者と共同戦線をつくつたことであつて、社会黨がこれらのブルジョア政黨と共同戦線を結成したことは、労働者階級に對する裏切りであると非難されたが、クリスピのはげしい弾壓の前にはやむを得なかつた。これらの共同戦線派は、「極左派」と呼ばれ、一八九七年の總選挙には、社会黨の二〇の議席をふくめて六七名の議員をおくり出したのである。やがてクリスピはアビシニア侵略に失敗して失脚し、そのあとをアントニオ・ルデイニが内閣を組織したが、彼はクリスピにもおとらぬ弾壓者で、労働組合に對して弾壓を強化し、ストライキを禁止して共同戦線に楔をうちこもうとした。ときあたかも一八九九年、イタリア全土にわたつて不安の空氣がみなぎり、米西戦争の結果、原棉の輸入がとだえ、穀物は不足し、そのため労働者の生活はひどくなつて、ストライキはしきりにおこり、ついに最大の工業都市ミラノには暴動がおこつた。そして二人の警官と八十人の民衆が殺され、四五〇名が負傷したほどの大事件をさかいて、イタリア労働者階級の力は支配

イタリアにおける社会民主主義とファシスト運動

五七 (二四一)

三

一八九二年から一九一四年までの約二十年は、イタリア社会黨にとつては大きな飛躍の時期であつた。今迄は一部の知識階級や先覺者たちが、社会主義の福音を説いていたのであつたが、一八九〇年代になると、労働者階級も次第に階級意識に目ざめはじめ、各地に労働組合が結成されつゝあつた。しかし労働者階級の勢力が増大し、社会黨の組織が強くなればなるほど、支配階級の壓力が加わるのは當然であつた。そしてかういふ下から上り力と、上からおさえつけようとする強い壓力とが衝突して一大事件となつたのが、シシリ島の農民の反亂であつた。しかしさきにも述べたように、資本主義的に立ちおくれたイタリアでは、農民たちは、まだプロレタリアートとしての階級的な自覺は、きわめて低い段階にあつたので、近代的な労働組合というものは存在しなかつたけれども、シシリ島には、すでに一八六〇年ごろから *Fasci dei Lavoratori* という農民の組合ができていた。一八九三年シシリ島の農民たちは、貴族的な大土地所有制度と、そして支配者フランススコ・クリスピの壓制に反對して組織的に大規模な反亂をおこし社会黨はもちろん、マジニの流れを汲む共和主義者さえもこの運動を支持したのであつて、この運動が純粹に社会主義的なものでなかつたことはあきらかである。だが國內におけるこのような弾壓の強化は、その當時のイタリア資本主義の矛盾ときりはなして

階級にとつてはもはや手におえないものとなつた。そしてこの暴動が、社会黨の本部のあるミラノにおこつたことは興味深い。このようにして社会黨は發展をつづけ、一九〇〇年の總選挙には社会黨議員は二〇名から三三名に増大し、指導者ピソラティとトゥラティの努力により、統一戦線を維持することができたのだ。しかしこのときジョリティ内閣の成立、従つてジョリティという老獪な政治家の出現はながくイタリア社会黨の運命を左右することとなつたことは注目されなければならぬ。當時、労働運動はサンディカリズムの影響をうけはじめ、ともすれば思想をとまなわぬ行動主義におちいりがちであつた。そのために黨内にはようやく分裂の機運があらわれはじめ、二十世紀初頭の十年間は、社会黨の組織は、一見はなほだ強くなつたように見えながら、その實、内部には大きな動揺と不安とがきざして、そしてこれがまたジョリティの乗ずるところとなつたことは云うまでもない。まことに、アントニオ・ラブリオラを指導者とするサンディカリスト、ピソラティやボノミを中心とする改良主義的な右派、そしてトゥラティなどの中間派がともに存在して、イタリア社会黨の性格を特徴づけていた。そのために社会黨の下部組織である労働者同盟は、マルクス主義よりも日和見的な改良主義からより多く影響をうけた。そしてかういふ改良主義が支配的なうちに、イタリアは第一次大戦に突入した。

四

戦争中における社会黨の態度は、大體において日和見的であつたと云えよう。トゥラティやトレヴィツ、そしてムッソリーニなどは中立主義、戦争不介入主義をとつたのであつて、このころからムッソリーニが頭をもたげてきた。彼はサンディカリズムの影響をうけ、みずから社会主義者と稱して、ミラノで日刊新聞を發行し次第にその勢力をつくりつつあつた。彼は最初は戦争不介入、中立主義の立場をとりながら、社会黨が次第に戦争協力の色をこくしてゆくや、にわかはその態度をかえ、自分の支持者たちを集めて「戦闘隊」(Fasci di Combattimento)を組織し、他日の蜂起にそなえてぬかりはなかつた。一九一七年三月、社会黨はトゥラティの指導のもとに、戦後に行わなければならないべき計畫を發表し、共和国憲法、一院制、高級官吏の公選、公共事業など、民主的な共和国の建設をほめたとき、ロシア革命のニュースは人々をおどろかした。そして社会黨内部の動搖、右派トゥラティとトレヴィツ、左派ラザリ及びボンパッキ、この兩者の對立によつてその分裂はさげがたいものとなつた。それはまた改革派と革命派、愛國主義者と敗北主義者との對立でもあつた。

こうしている間に、戦争は終末に近づいたが、イタリアは大戦の結果、戦勝國であつたにもかかわらず、ウィルソンの十四カ條によるロンドン條約の排除のために、領土分割の仲間入り

の革命的な思想と國家主義や偏狭な愛國主義にすりかえたムッソリーニのやり口は巧妙であつた。

だがこうした沈滞した空氣のなかにも、革命的な機運が次第におこつてきた。一九一九年七月、労働者階級は政府のソヴェート・ロシアに對する干渉を不満として國際的なゼネストに参加し、また益々高くなる物價に生活の脅威を感じたロマニヤやトスカニの労働者たちは、食糧倉庫から食物を没収して、ここに食物配給のための地區ソヴェートを建設した。しかもこれを鎮壓するために派遣された軍隊までが同調して一緒になつてしまつたことは政府をおどろかしたのである。このようにして下からの革命的な行動におされて、かねて日和見主義をきめこんでいたトゥラティの社会黨も、黙つてはいられなくなつた。そして一九一九年十月、ボロニヤで開かれた社会黨大會ではつぎのような三つの動議が提出された。すなわち、(一)ジェノア綱領の變更を求め、(二)イタリア社会黨は共産主義インターナショナルに加入し、その名をイタリア共産黨と改めること、(三)ロシア革命の成功はこれを認めるが、社会黨は國內における民主的改革を強調することであつた。(一)は左派の見解を代表し、(二)は右派の主張であつたことは勿論である。それならばイタリア社会黨は、實際にどの方向に進んだであらうか。一九一九年の總選挙において、すでに一七五萬票を獲得し、一五六名の議員をおくり出した社会黨は、みずから革命的な政權をつくらうと思えば、できないことではなかつたが、しかし彼等はそれをし

イタリアにおける社会民主主義とファシスト運動

を許されず、新しい貿易協定すらも結ばれなかつたために、イタリアの民衆は、大きな不満と幻滅にかられた。こうして戦争後、イタリアをおそつた反動的な機運をうまく利用し、戦後土地を與えられることを期待しつつ、しかも裏切られた小作人たちをうまくひきつけながら、社会黨に對抗してここに庶民黨が生れたのであつた。そしてこの背後にあつてこれを援助したのもこそローマ法王であつた。ボルシェヴィキ革命とこれにつづくドイツの敗戦、ドイツ及びオーストリア皇帝の退位、ハンガリー革命、バヴァリアの政變、ベルリンでのスバルタス團の活動などの、國外の革命的な動きはイタリアにも波及し、次第にたかまつてゆくインフレーションと生活難とは、民衆の不満をかり立て、労働者階級を革命的なものにしたのであつて、イタリア資本主義は大きな危機に直面した。一九一八年、リラは一ドルに對して六・三四リラであつたが、一九一九年には八・〇五リラとなり、更に二三・〇七リラとなり、ついに一九二〇年のはじめには、一八・四七リラと下落したのであつて、それがために生活費はわずか十八ヵ月の間に三〇〇%も騰貴し、復員軍人の失業や青少年の不満によつて、社会不安はひろがつていつた。すなわち戦争による青年のひどい幻滅と頹廢主義、そしてまた空虚な英雄主義は、ダヌンツィオなどの詩人的な文學と結びついて多くの青年たちに影響をあたえたのである。そしてこうした風潮こそファシストたちにとつては、またとない好機であつた。「未來は青年のもの」などと宣傳して、青年たち

なかつた。指導者の一人、グラツィアディは機關紙アヴァンテ・イ(前進)のなかでつぎのように云つた。「われわれはボロニヤの大會で決められたコースを歩むべきではない。つまり喧嘩と議會での批判によつて、内閣の危機と政府の倒壊をよびおこすべきである……」と。その間に皇帝はニッティのあと、再び巧妙なジョリティに組閣を命じ、對社会黨工作にのり出した、しかし、せまり来る生活の脅威のために、ついに一九二〇年九月、労働者による工場の占領が行われた。その組織の力において最も強いといわれた金屬労働者たちは、トリノの工場を占領し、その占領した大車輪工場を中心として、ピエモンテやロンバルディアなどの北部イタリアにその運動をおしすすめていつたのであつて、その運動の指導者はイタリア共産黨の建設者であつたアントニオ・グラムスィとパーミロ・トリアットイであつた。「グラムスィは工場ソヴェート運動の先頭に立つた。一九一九年五月一日に、彼が創刊した『新秩序』はこの運動の機關紙であつたのだ。」<sup>(1)</sup> 彼等は奮闘した。總同盟も同じ種類の運動を全國におしひろめること、その運動を革命に轉化することなどの指令を發して、これを援助したのだが、しかし社会黨はすでにジョリティの甘言にのせられて、トリノの労働者たちの革命的な蜂起にはあまり好意をよせなかつた。ジョリティは社会黨の指導者、ボノミ卿を通じて、労働者たちに資本家と妥協することをすすめて、しかもこれに成功したとき、ボノミはつぎのように云つた。「自由が叛亂を亡ぼしたのだ。そして完全な自

由のなかに、反逆者たちは自分の失敗を認めなければならなかつたのだ」と。こうして一九二〇年の革命的な蜂起は社會黨指導者の裏切りとジョリテイの老獪な政策のために失敗した。一度は筋肉労働者だけでなくホワイト・カラーをも含めたこの運動は、一九二〇年の革命的な昂揚を最後として空しくついで去つたのである。そして人々は、ボノミ卿が反逆者とのしつた共産主義者が、すぐ、と立ち去つたそのあとから、恐るべきファシストたちが好機至れりと、ほくそ笑んでいたの知らなかつたのであろうか。

ジョリテイはファシストの毒をもつて社會黨の毒を制しうるものと考えた。一九二二年の總選挙においては、ムッソリーニの黒シヤツ隊は、公然と社會黨員に暴行を加え、ファシズムはようやくその本性を暴露しはじめた。社會黨は、ここで二二名の議員を失つたのに反し、ファシスト黨は三三名に増加したけれども社會黨はまだ第一黨であつた。もし社會黨がこのとき、あの一八九六年の經驗に學んで、たとえば庶民黨と共同戦線を結んだならば、ファシズムの脅威は或は未然に防ぎえたかもしれない。しかし社會黨はこの機會を利用しなかつた。それどころか、黒シヤツ隊の暴力におびえた彼等は、こともあろうにムッソリーニと「和解の約束」を結んだのであつた。もはや勝敗はきまつた。「社會黨はじつと立つて自分自身の孤立をほめたたえ、そして、成功が、すぐそばにいる人々を吸収するか、中立することにかかつている」という革命的な時期に、『世界に

反對して孤立せよ』という合言葉の不合理に気がつかなかつたのだ」と、現在の社會黨の指導者ネンニは回想しているが、もはやトゥラティの努力も總同盟のセネ・ストも效を奏しなかつた。そして一九二九年には、ムッソリーニはみずから皇帝の信任を得たと稱し、ファクタ内閣を暴力的に打倒し、庶民黨の支持を得て内閣を組織した。一九二二年頃になると、ファシストの暴力は民衆の恐怖の的となり、言論と思想の自由はおびやかされるに至つた。そしてついに庶民黨のドン・シネトルツが、ムッソリーニに協力しないことを宣言するや、彼は最後の暴力的行為に訴えて、「議員三分の二法」という無類の惡法を通過成立させたのである。これは總選挙において、ある黨派が最高の票を得た場合には、無條件でその黨派は三分の二の議席を獲得するといふ、まことにおそろべき法律であつた。かくしてムッソリーニは、あらゆるぎまんと暴力とを駆使した結果、一九二四年、ファシスト黨はついに第一黨にのし上り、これに抵抗した社會黨の代議士ピクシニニは虐殺され、敢然起つて黒シヤツ隊の暴力を非難し、ムッソリーニの責任を追及したマテオッティは暗殺されたほどであつた。

ここにおいて一九二四年六月、トゥラティ等は、マテオッティの追悼會をアパンチノの丘でもよおし、同志を糾合して、ムッソリーニを最高裁判所に告發すべきことを決議したが、權力がムッソリーニの掌中にある以上、失敗は火を見るよりも明らかであつた。かくして一九二五年一月三日をもつて、イタリア

にはデモクラシーはその影をひそめ、ファシズムが公然と暴力を振うにいたつた。ムッソリーニは勝ち誇つたようにつぎのよりに云つた。「憲法第四十七條には、衆議院は大臣を最高裁判所に告訴する權利を有する」とたわれているが、私はおごそかに問う。この議院の内外において、誰がこの第四十七條を自身に適用することをのぞむ者があろうか」と。そして彼は更に露骨にも、つぎのように告白してはばからなかつたのだ。すなわち、「私はこの議會及び全イタリア國民の前に宣言する。

私として私のみが、今までおこつたすべてのことに對し、その政治的・道徳的そして歴史的な責任をひきうける……もしあらゆる暴力が、ある歴史的・政治的そして道徳的な風潮の結果であつたとすれば、それはまさしく、われわれが戦争に介入した當時から今日まで、私がおこなつてきた宣傳をもつて、そういう風潮を實はつくり出してきたからなのだ」と。ファシズムは假面をぬぎすて、惡魔の本性をあらわした。スフォルツァ、グラムシイそしてゴベッティやロッセリなどの良心的な人々は殺され、その他の指導者たちは或は地下にもぐり、或はロンドンに亡命したのである。

(1) イタリア共産黨小史國民文庫、三二頁

五

數年前、わが國でも上映されたイタリア映畫、「無防備都市」を觀た人々は、ヒットラーとムッソリーニのファシズムがどん

イタリアにおける社会民主主義とファシスト運動

なに殘虐なものであり、しかもこれに對するイタリア民衆の抵抗が、どんなに根強かつたかに心打たれたことであらう。ムッソリーニが權力を奪取したのちに、イタリア社會黨は、その指導者の多くが海外に亡命したために、重大な危機に直面し、次第に弱體化していつた。トゥラティをはじめ、ニッティやネンニなどは、パリにおいて反ファシスト運動に従事し、新聞を發行するなどの宣傳にとめたが、その効果はうすく、しかも地下運動とはほとんど關係がなかつた。われわれはここで、一九二五年から一九四三年のファシズムからの解放までの間、地下運動によつて、頑強な鬭争をつづけたイタリア共産黨の努力をあげなくてはならない。彼等は社會黨の指導者の多くの者のように、亡命せずに國內にふみとどまり、身を賭してたたか

つたのである。云うまでもなく、はげしい弾壓と拷問のために耐えきれず、轉向したり裏切つたり、もしくは右翼的な日和見主義に走つた者も少くなかつたけれども、多くの良心的な指導者たちは、反ファシスト統一戦線を叫びながら、その信條に生きたのであつた。一九三〇年代の世界大恐慌を契機として、ファシスト勢力が氣狂いじみたほど殘虐となり、ヒットラーの統總就任や一九三五年のイタリアのアビシニア侵略などによつて、いよいよファシストが第二次大戦への準備をはじめたとき、強力に戦争反對を叫び、社會黨との統一戦線をよびかけたものこそ、トリアッティを中心とするイタリア共産黨であつた。そしてこの努力は效を奏し、一九三四年八月、パリでイタ

リヤ共産黨と社會黨とは、つかりと手を握つたのである。

一九二一年イタリア共産黨が建設されてから、約十五年にしてようやく反ファシズム統一戦線は成つたわけである。しかもこれより先、フランス共産黨と社會黨との間にも、統一行動に關する協定が結ばれ、いわゆる人民戦線政府が組織されるに至つた。やがて一九三六年のスペイン動亂は、ファシストが勝利をせしめたために、人民戦線は失敗したのだが、とにかくこの時期になしたげたイタリア共産黨の事業は偉大であつた。統一戦線こそファシズムを倒し、民衆の心をつかむことを共産黨も社會黨も學んだことは、それからのイタリア社會主義運動の上に影響をあたえた。一九四三年、ムッソリーニが倒れたあと、共産黨もバドリオ政府に参加したことは、この教訓にもとづいていたのであつた。現在のイタリア社會黨と共産黨との統一戦線が、たんなる理論の上だけでなく、苦しい實踐とにがい経験を通じてきき上げられたものであつたことを、讀者は知ることができたであらう。

※ ※ ※ ※ ※

わたくしは以上ヒルトン・ヤングの著書を通じて、イタリアにおける社會主義運動の歴史のなかに、ファシズムのほんとうの姿をとらえようところをみた。ファシズムはどんなにおそろべきものであるか、それは、いかなる思想も宗教をも否定する暴力的なニヒリズムであり、文明の敵である。そしてわれわれが最も眞剣に考えなければならぬことは、ファシズムが、一九

三〇年代の問題であるばかりでなく、實に今日の重大な問題であることである。それゆえ、民主主義に忠實であらうとする者は何人も、ファシズムに反対しなければならぬ。

—一九五四・一一・二四—

《追記》 わたくしはこの書を読んだとき、著者、ヒルトン・ヤングの人となりについて知ることができなかった。ところが、最近、勞働黨首アトリーの自叙傳を読んだとき、ヒルトン・ヤングは、後のケネット卿であり、第二次マンドナルド内閣の保健相をつとめた人であることがわかつた。(C. R. Atlee: As it happened, his autobiography, p. 7)

書評及び紹介

ワレン・C・スコヴィル

『フランス經濟におけるユグノー教徒』

Warren C. Scoville: "The Huguenots in the

French Economy, 1650—1750." Quarterly

Journal of Economics, August 1953, pp.

423—444.

ナント勅令の廢止によるユグノー教徒の亡命は、ルイ十四世の治世の末期におけるフランスの經濟的衰退の重要な原因と看做されて來た。しかし從來かかる主張に對して納得の行く説明が試みられていない。ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかについては、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわなければならないのである。

しかし以下に紹介されるスコヴィル氏の論文は、依然として再吟味を必要とする段階にあるといわれるこの問題に對して速答を與えようとしたものではない。同氏の論文は、フランス經濟のなかでユグノー教徒が占めていた地位について言及したもので、ユグノー教徒の亡命がフランス經濟に如何なる影響を及ぼしたかという終局の問題を解明するための手懸りを與えようとしているに過ぎない。スコヴィル氏のことでの直接の問題は、ユグノー教徒が經濟面で著しく活動的であつたという證據があるか、もし活動的であつたとすれば、この事實を如何にしたら最もよく説明することが出来るかの二點であらう。

書評及び紹介

六三 (二四七)

ナント勅令によつてユグノー教徒は自由な經濟活動を保證され、フランスの各地において顯著な經濟進出を實現することが出來た。當時、「この國の商工業の三分の二は彼等の手中にあつた」と信じられていた程であつた。ユグノー教徒の盛んな經濟活動についてスコヴィル氏は次の事實を指摘している。

最初、その商業活動については、ポルドー港のユグノー教徒は葡萄酒貿易を獨占し、またアメリカ貿易において重要な活躍を示していた。ポルドー經濟においてユグノー教徒が果していた役割は重大であり、「もしこの商人のうち若干がいなくなれば、現状から推し、貿易にとつても非常に不幸であらう。何故なら、大部分の貨幣を持ち、ポルドー港の貿易の壓倒的部分を引受けていたのは彼等であるから」といわれた程である。ラ・ロシェルもユグノー教徒の重大な經濟中心の一つであつた。ここを根據としてユグノー教徒は海運業を獨占し、また附近のロッシンオールに基地を持つフランス海軍に對し物資を供給していた。知事の報告は、ラ・ロシェルにおけるユグノー教徒の經濟的地位について、「この地方の貿易は新教徒の手中にあり、誰も現在においては大きな損害を蒙ることなくこれを彼等の手から奪うことが出來ない。何故なら舊教徒は貿易を遂行するだけ強力ではないから」と述べている。ナントのユグノー教徒は外國商社の代理人として活躍していた。メツツにおいて新教徒は卸賣業の獨占者であつた。またリヨンの新教徒は商業に従事し、巨大な財産を蓄積していた。

次に、その工業活動について。二人のユグノー教徒によつてカアンには織物工業が発達し、「この二人のユグノー教徒の勤勉も設備も持たない」舊教徒には到達することの出來ない程の